

千里地理通信

関西大学地理学・地域環境学教室会報 第84号

Newsletter of Department of Geography and Regional Environment, Kansai University

Contents

Page 1 ……

巻頭随想

春はまだ来ぬか

野間晴雄

Page 2-3 ……

同窓会通信

卒業生だより

北の大地で関大の

学びを活かす

水野 真

同窓会事務局ニュース

松井幸一

Page 4-7 ……

研究ノート

ユネスコ世界ジオ

パークにおける地

域資源の活用

一室戸ユネスコジオ

パークを事例に一

趙 欣鑫

中国における紹興

酒造業の成立とそ

の地域展開

李 嘉文

Page 8 ……

学窓から

一学生として見た

関西大学地理学教

室：2005～2021年

齋藤鮎子

Page 9-10 ……

日帰り巡検報告

富田林寺内町と羽

野丘陵・古市古墳群

藤井 純

Page 10 ……

教室へのご寄付の

お礼

Page 11 ……

実習調査報告

滋賀県湖東地区で

の実習調査

前山みつき

Page 12 ……

大学院生の研究業績

Page 13 ……

教室だより

Page 14 ……

随想

測量学講義・実習

についての覚書

水田憲志

Page 2-3, 9-11 ……

卒業生・修了生から

のひと言

新専修生からのひ

と言

春はまだ来ぬか

野間 晴雄

2020年3月15日夜、私はドミニカ共和国の首都のサントドミンゴから、ニュージャージー州のニューアーク、成田経由で関西空港に降り立った。アメリカは13日に国家非常事態宣言を発令、ニューヨーク市の死者が急増し、22日にニューヨーク州がロックダウンする直前の離れ業の旅のフィナーレであった。

世界中で新型コロナウイルス感染拡大の恐怖・不安が増すなかでの決死のドミニカ・ハイチ訪問だった。ドミニカから陸路でハイチへ、そして再びドミニカへ陸路で島の中央部を10日間で一周した。荒涼とした標高-45mのエンリキージョ湖畔の国境検問所は、ハイチからの出稼者でごったがえしていた。この凹地の断層が2010年のハイチ地震を引き起こした。なんとか国境を通過して眼前に現れた首都ポルトープランスは、震災後の混乱がまだ尾を引き、長年の政治腐敗に市民の顔には絶望感が漂う。まち全体が不法占拠の修羅場であった。

帰国の翌日、大学の事務室にいったら職員の方々の避けるまなざしがあった。翌日には電話での2週間の自宅待機要請。このため、卒業式と学位授与式は欠席、新任の黒木教授の大学への搬入荷物の手伝いもすべてキャンセル。2002年春に着任して以来、はじめて疎外感を味わった。

2017年11月、私は小城下町を探索するため、越後の長岡、村上、村松、高田をレンタカーで、さらに取手で一泊、茨城県の下妻、下館をめぐる。関東鉄道常総線は三十数年ぶりの乗車であった。全線非電化51kmのローカル私鉄沿線は、70年代の常総ニュータウンの住宅開発と、2005年のつくばエクスプレス開業で南半分の風景は大きく変貌していた。なぜこの路線が東京圏にあるのに現在も非電化であるのかは謎だったが、その時やっと氷解した。茨城県石岡市に気象庁の地磁気観測所があり、電化すると漏洩電流で地磁気観測に支障を来すためだめだった。直流は交流よりも漏洩電流が大きいので、新設のつくばエクスプレスも、秋葉原・守谷間は直流、守谷・つくば間は交流となっている。

水海道を過ぎると1両のディーゼルカーは2015年9月に水害に見舞われた鬼怒川・小貝川のあいだの低湿地を快走する。旅行前から少し痛んでいた膝が車内でうずきだした。下妻では駅前の無料レンタサイクルでなんとか切り抜けた。下館ではタクシーを利用して城跡をめぐる。ただ最後の結城でとうとう動けなくなり、地元の鍼灸院で針をうってもらい、ほうほうの体で新幹線の小山駅へ。東京駅の新幹線乗り換えでは、駅員に車椅子を押しもらった。会社が異なるため、介助者もJR東海とJR東日本で交

替したが、これほど有り難かったことはなかった。終電間際の京都駅では助役さんに八条口駐車場まで運んでもらった。車で迎えに来てくれた妻と夜0時前に帰宅、生涯でいちばん長い日だった。

それからまたいへんな日々が続いた。翌日、整形外科にいき、膝のレントゲン、MR検査をうけた。診断は加齢性の膝関節症とのこと。この歳になればだれでもなる病気とあっさりと医者はいうが、私にとっては死活の大問題である。定年後に妻への借りを返すためにも、海外や国内旅行、美術館や博物館巡り、食べ飲み歩きをするためにも、歩行の維持は欠かせない。2人ともこれらにいたって目がない。それができないと思うと目の前が真っ暗になった。1か月は自動車通勤し、ヒアルロン酸注射で痛みを抑えてきたが、医者も言うように対症療法でしかない。手術は避けたかったので、評判のいい整骨院で骨盤矯正を続けること1年、杖なしで歩けるようになり、中国、ベトナムへも行くことができた。ただ、海外を一人でまわるには不安があった。カリブ海域の製糖史で科学研究費を受けていながら、2018年度の 에스パニョーラ島の調査は断念した。1年の延長願いを提出、その最終年度の最後が2020年3月。そこに降って湧いたのが、前年12月に武漢で発生したかのCOVID-19だった。

私は判断に迷ったら少々の無理をしても困難な道を選ぶことを好む。根っからの楽天主義者で、禁欲的な筋トレも健康管理もしていないが、場末のおいしいものには目がない。健康診断の結果は毎年「要指導」である。最小限の治療薬は服用しているが、2年前に通院した整形外科で目の当たりにした高齢者のサロンと化した雰囲気は耐えられない。歯医者も、歯周や歯石除去の衛生指導で細切れに長く通院をさせる綺麗なクリニックは肌に合わない。そのため関大西門横の歯科を長年愛用してきた。予約不要、歯科助手もおかず、80歳近い先生が一人で切り盛りする古ぼけた歯医者だが、過剰な治療はしない。四方山話しをしながら、海外調査に行く前に、出発日について、いつも応急処置だけをしてもらっていた。

2月下旬、久しぶりに関大前の商店街を歩いてみた。飲食店の閉店と改装工事の多さにわが目を疑った。くだんの歯科も取り壊し中だった。6月に3階建てビルで新装開院の立て看板。息子さんが後を継ぐのだろうが、私にはコロナ禍で中断している歯の治療の行き場を失った一抹の寂しさを覚えた。

近年は温暖化の影響で3月の卒業式の頃に関大の桜が咲き始め、学生でごった返す4月第1週には葉桜が多くなった。この3月末、私は関西大学をいったん退職する。そのあと3年間、ものぐさ生活術でこの鰻鮎の急を乗り切り、教員として有終の美を飾るのがとりあえずの目標である。

(のま はるお：本学教授)

〈学部生〉

井野 厚

私は要領が悪く、何
度も周りに迷惑をかけ
てしまいましたが、尊
敬できる先生や仲間達
に恵まれ、この場で学
べる幸せをかみしめて
やってきました。有難
うございました。

赤阪怜美

実際にその地に訪
れ、見る、そして現地
の人の声を聞く大切さ
を学びました。多くの
経験と素敵な仲間に出
会い有意義な大学生活
を送れました。ありが
とうございました。

赤澤祐介

大学にはいて地理
学に出会い、仲間たち
とかけがえのない時間
をすごさせていただ
いたこと、私の中で大き
な財産です。ありが
とうございました。

秋田航志

地理学では仲間や先
生方に恵まれ、充実し
た大学生活を送ること
ができました。ここで
学んだ知識や経験を糧
に新社会人として頑張
ります。ありがとうございます。

天野 奏

実際に出掛けて外の
世界を知ることが出来
たのはとても貴重な経
験になりました。地理
学専修を選んで本当に
良かったと思います。
ありがとうございます。

荒川 望

実習や卒論執筆を通
じて、自ら考え行動す
ることの難しさやその
重要性を学びました。
地理学教室の皆さんに
は大変お世話になり、
感謝しています。

板垣早紀

理学の授業や巡検を
通じて、さまざまな土
地に足を運んで学ぶ
機会を沢山得られました。
3年間のどこを切り
取っても素敵な思い出
です！ありがとうございます。

川中悠生

数ある専修の中から
地理学専修を選んだこ
とに一切後悔はありま
せん。地理学専修を選
んだおかげで、充実し
た大学生活でした。地
理学専修の皆様と過ご
した日々は忘れませ
ん。ありがとうございます。

私は、関西大学第一高校から関西大学文学部
の地理学・地域環境学専修、大阪教育大学連合
教職大学院（大阪市天王寺区）を経て、2020
年4月から、立命館慶祥中学校・高等学校（北
海道江別市）にて社会科の専任教員として勤務
しております。

関西大学在学時から高校の地理の教員を目指
しておりました。しかし、大学4回生のときに
受けた大阪府教員採用試験において「地理の知
識は豊富かもしれませんが、教育に関してはそ
こまで経験や知識はありませんよね。せいぜい
教育実習だけでしょう」という厳しいお言葉を
いただきました。そこで、地理の専門的な学び
はもちろんのこと、教育学にも目を向けるべ
く、大学院にて「理論と実践の往還」のもとに
府内公立進学校にて地理から少し離れ、探究学
習を実践的に研究させていただきました。また、
その際に野間先生より大阪教育大附属高校
池田校舎での地理の非常勤講師もご紹介いた
だき、関大地理OBでもある森田浩司先生にも現
場で多くのご指導をいただきました。

大学院修了後は学校法人立命館にご採用いた
だき、初任校として京滋の3校（長岡京、宇
治、守山）ではなく、札幌郊外の立命館慶祥中
学校・高等学校で教員人生をスタートしまし
た。私の周りの教員志望者は地元志向が強い雰
囲気でしたが、企業就職の同期（特に高校から
の友人）は全国転勤も当たり前の世界ですし、
地理の教員としては新天地、開拓者の気持ちで
向かいました。

勤務校は道内ではトップレベルの私立難関校
で、寮も設置しているため、道内でも通学困難
な宗谷、オホーツク、十勝、釧路などの地域や
道外、海外からも入学者がいる中高一貫校で
す。中学生は寮生活ができないために自宅通学
生のみですが、旭川や苫小牧、小樽などからの
遠方通学生もいます。関西の私学の状況と比べ
て北海道の私学の立ち位置は非常に厳しいと感
じました。私立中学校は札幌近郊に複数ありま
すが、定員を満たす学校はほんのわずかです。
札幌では、札幌南、札幌北、札幌東、札幌西の
東西南北の4つの公立高校が人気で、私立学校
はグローバルやICT、スポーツなど学校の特色
を出すことで受験生を集めることが求められて

います。将来的には道内の子どもの人口が半分
になることを想定していまから行動することが
必要になってきています。早期の優秀な人材の
囲い込みとして私立小学校の設立も進め、北海
道日本ハムファイターズの元・選手が代表を務
める学校法人が立命館と連携し、勤務校への接
続入学も視野に入れた動きも出てきています。

With コロナの時代、学校現場でも多くの問
題を抱えてのスタートとなりました。入学式、
始業式を行った後、早々に在宅学習に切り替わ
り、オンラインでの授業になりました。幸いなこ
とに大学の早い対応からZoomを用いた授
業の配信もできるようになり、学びを止めない
ことを念頭に授業が行われました。「紙媒体で
の学習」「オンデマンド配信学習」「オンライン
学習」の3パターンをバランス良く行い、子
どもたちの家での学習を強く押し進めました。
しかし、教員の対応にも差がありました。いわゆ
るICT機器に強い教員はZoomを用いて授業を
展開し、苦手な教員はプリントベースの家庭
学習になるなど大きな差が見られました。私
はZoomでのオンライン授業と動画配信のオン
デマンド学習を併用し、繰り返し学べる環境を
整備しました。地理の授業では関大の講義で学
んだ田園都市構想や鉄道忌避など中高生が興味
を持てるように、映像、画像教材を使いながら
日々子どもたちと過ごしています。また、世界
地誌の学習ではGoogle Earthを使って、世界の
名所や自然的景観をストリートビューで確認
し、その景観、雰囲気を感じさせました。勤務
校は研修旅行を体系的に実施しており、中学校
段階では地元の北海道、大学所在地の京都、そ
して世界へという流れがあります。しかし、コ
ロナ禍において海外への渡航はかないません。
札幌からGo toトラベル事業では出発も到着も
自粛を要請されるなど先行き不透明な状況で
す。その時できる最善策を子どもたちのため
に行っていければと思います。

最後に雪の話をしたと思います。初めての
雪国の生活、毎朝カーテンを開け積雪があるか
をワクワクしながら確認する時期は過ぎ、積
もっていないかを心配する日々となってしま
した。札幌市も降雪はあるのですが、北部に位置
する江別や岩見沢はずっと多く積もるよう

す。札幌市内から通勤の際も、周りの景色が雪深くなっていき、自動車運転の緊張は大阪の時に比べて高まりました。関西大学から立命館というライバル校での就職ではありますが、地理学教室で学んだ地理の面白さを広め、自らの持

てる力を活用して、目の前の子どもたちとともに成長します。

(みずの しん：学部 2018 年 3 月卒，立命館慶祥中学校・高等学校教諭)

河内真矢

教授からは巡検や雑談を通し様々な知見を深めて頂くと同時に、同窓とは競い高め合ってきました。地理学教室での出会いに感謝です。数年後、互いの地で成長してまた会いましょう。

小西志門

授業や巡検、支えて下さった先生方や共に頑張った仲間がいたから楽しむことができました。かけがえのない時間に感謝！本当にありがとうございます。

猿渡凛太郎

関西大学に入学し、地理学というとても汎用性のある学問に出会い、幅広く学べたこと、またフィールドワークでその地へ向出くことは自分にとって非常に良い経験になりました。

瀬口知樹

地理学では、新たな仲間とともにたくさんの知識を得ることができました。ここでの経験を今後に活かしていきます。

辻 美里

普段の授業や巡検、実習調査など、他では得られない経験をさせていただきました。地理学を選んだことで、充実した大学生活を送ることができました。ありがとうございます。

西浦 慧

高校時代とは少し異なる形で地理学を学び、地域を見る目が変わったため、まち歩きも楽しくなりました。今後も学びを活かし、励みたいと思います。ありがとうございます。

西口輝一

この3年間は想像していたよりも素晴らしい日々でした。好奇心が赴くままに、自由な学びができました。卒業後もより遅く成長できるよう精進していきます。

廣田真子

新しく知ることが沢山あり、とても濃密かつ新鮮な3年間でした。先生方、同期のみんな、とにかく人が優しく心置きなく居られるこの空間が大好きです。ありがとうございます。

水野真心

地理学で出会えた人たちはみんな最高でした。大学生活は一瞬でしたが、みんなと同じ時間を共有できてとても楽しかったです。

・〈同窓会事務局ニュース〉

- ・2011年の卒業生に対して、事務局から郵送による消息調査をおこないました。
- ・2020年12月12日(土)14時から関西大学千里山キャンパスで第2回の「千里地理学会」を開催いたしました。
- ・2020年12月12日(土)の千里地理学会の前に、研究会・同窓会幹事会を開催いたしました。
- ・2021年度の行事予定は以下の通りです。変更などありましたら随時、HPでお知らせいたします。10月3日(日)秋の日帰り巡検、12月4日(土)史学・地理学大会(学部生による実習調査ポスター発表)、12月11日(土)地理学同窓会総会、2021年千里地理学会(第3回)
- ・今年度の卒業生の主な進学・就職先は以下の通りです。(50音順)
- ・イズミヤ株式会社、株式会社カナエジオマテックス、株式会社ルートゼロ、近畿財務局、国土交通省(航空管制官)、四国旅客鉄道株式会社、住友重機建機クレーン株式会社、東大阪市役所
- ・次の方々からご寄付をいただきました。大倉俊、吉兼崇博(50音順、敬称略)
- ・同窓会通信の執筆を募集しております。1ページ1600～1800字程度、半ページ800字程度です。執筆いただける方は教室メールアドレス[kandaichiri@gmail.com]までご連絡ください。また、会費の納入状況などのお問い合わせも上記メールアドレスにお問い合わせいたします。

地理学研究会と同窓会の統合についてのご報告とご意見募集

「千里地理通信」第80号、第81号でご意見を募集していた研究会・同窓会の統合について、2020年12月12日(土)の研究会・同窓会幹事会で審議がおこなわれました。

その結果、卒業生からは原案に対して異論がないこと、事務局の負担軽減の観点から研究会と同窓会の統合が認められました。幹事会では両者を統合した研究会について、より同窓会的側面を強める方向で進めることが確認され、研究会の名称を変更することが提案されました。これにともない幹事会・事務局では3つの名称を提案させていただきます。

- ①地理学研究会(名称変更しないパターン)、②ちりちり会(かつての地理学研究会の愛称)
- ③千里地理の会(新規の名称)。

この件につきまして、他の名称のご提案も含めて、卒業生の皆さんからの忌憚のないご意見を事務局へメール、葉書等でお寄せくださるようお願い申し上げます。

また両者が統合した研究会は以下の行事を専修・学会と共催することを確認いたしました。

- ①秋学期の徒歩巡検(専修との共催)、②12月の懇親会行事(千里地理学会との共催)。さらに今後は研究会単独行事として各地での巡検を計画していきます。(事務局長：松井幸一)

ユネスコ世界ジオパークにおける地域資源の活用

—室戸ユネスコジオパークを事例に—

趙 欣鑫

1. はじめに

ジオパーク (Geopark) は地形、地質学、考古学、生態学、文化的な価値がある大地の遺産の公園をさし、ジオパークはユネスコが支援する外部組織の事業である。1972年に条約の発効した世界遺産よりは遅れ、2004年から指定が始まる。地質遺産、自然景観に対して研究、教育、持続可能な発展のための体制である。世界遺産は自然の保護、現状保全の狙いが強いのにに対して、ジオパークは保護しながら、教育や観光、地域の活性化をめざす意図が強い。

本稿では、日本に9つある世界ジオパークひとつ、高知県の室戸ユネスコ世界ジオパークを対象に、ジオ資源を活用し発展していくための課題を考える。

2. 室戸市の概要と人口過疎化

室戸市は四国の東南端、室戸岬半島に位置する。半島の大部分は標高200～1000mの山地で、西南日本外帯に属する。主要河川は土佐湾側に流入し、それらの河口付近には小規模な沖積平野が発達する。面積の約87%以上を山林が占める。日本では標識的な海岸段丘として地理や地学の教科書に頻繁に取り上げられる。地震のたびに隆起が記録される生きた地形でもあり、地殻変動と気候変化によって海面が、相対的に低下して海食崖を形成、隆起し、見事な3段の海岸段丘が市域全体にみられる。

室戸市の人口は昭和の大合併時(1959)に32,884人であったが、2019年現在は13,032人と、60年間で20,077人も減少した。市成立の5年後、1964年に人口は4100人の減少を記録している。1964年～1984年の20年間において人口は緩やかに減少した。1984年から2009年まで人口は急減した。

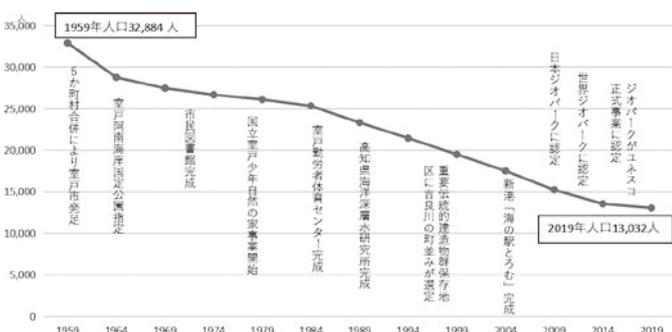


図1 室戸市60年間の人口推移

(各年度国勢調査「高知県統計資料」、室戸市ホームページより筆者作成)

これに伴い市の生産機能と都市機能著しく低下し、地域に大きな影響を及ぼしている。その要因としては、基幹産業である漁業の低迷、若年層の大都市圏への流出、少子高齢化が最も大きな要因である。人口では1975年には一時的に減少現象鈍化したが、1985年に死亡者が出生者を上回る自然減少の現象が初めて生じ、1988年以降もこの状況は続いている(図1)。

室戸市は1997年に市域全体が過疎地域の指定を受ける。「過疎地域自立促進計画」を策定し、交通通信体系と集落の整備、産業、教育と地域文化の振興、医療と福祉の確保に対して基本施策を図っている。新規の卒業者が市外に出て若者の流出が顕著であるため、市内に就労の場を確保するために、産業の振興と企業誘致に努力、地域雇用開発のための施策を講じて、地域経済活性化を図ることが重要である。

3. 「水産都市」室戸市の産業変遷

9世紀にノルウェー、フランス、スペインで始まった捕鯨は、日本でも江戸時代に太平洋や東シナ海沿岸で広がった。1606年、太地(和歌山県)で最初の「鯨組」による組織的な捕鯨が始まる。ここから技術が移転した室戸でも約400年の歴史がある。室戸には津呂組、浮津組の二つの鯨組があった。

明治末期のノルウェー式捕鯨導入後は、室戸市と奈半利町に捕鯨会社が設立され、捕鯨業は隆盛を極めた。大正期に室戸岬沖で礁が発見され、漁船の動力化と大型化が進む。しかし昭和初期には日本近海のクジラ資源が枯渇し、捕鯨船は母船方式で南氷洋へ出漁することになった。このほか室戸では沖合漁業も盛んで、戦前には20t以上のカツオ・マグロ漁船が60隻も保有して時期もあったが、アジア・太平洋戦争で室戸の漁業に壊滅的な打撃をうける。

戦後の日本は、経済成長と所得の向上により、国民の魚消費量は増大し、しだいに高級な水産物を追求するようになった。日本周辺海域の水産資源の枯渇は、日本近海以外の水域の資源を指向する。日本の遠洋漁業は1960年から1970年前半にかけて全盛期をむかえる。室戸はその拠点都市のひとつとなった。しかし1975年頃からは様々な経営上の困難が続き、「水産都市」室戸市は産業転換を迫られる。国連海洋法会議で1973年に決まっ

た200カイリの領海問題は、室戸のマグロ漁業の経営にも重大な影響を与え、倒産や減船が相次ぐことになった。

そのなかで、室戸岬東側の海域の陸棚は約2kmまでと狭く、その沖合が急激に落ち込んで深海となっている。この好条件を利用した海洋深層水の取水は室戸市の有望産業である。市は全国に先駆けて、海洋深層水の取水・研究・商品の開発に取り組んみ、1995年10月から民間企業への分水を開始し、翌年には日本初の深層水商品が誕生した。海洋深層水が観光や健康の増進に活用されて、室戸市の地場産業として発足している（森川・奥野・篠原2005）。



写真1 室戸海洋深層水株式会社（筆者撮影）

室戸市の農業は水産業に比べると生産額も少ない。海岸段丘上では近世に葉たばこ、甘蔗、茶が栽培され、低地では零細な稲作が行われてきた。工業では船舶機械の製造がみられる。林産物としては、海岸付近に生育するウバメガシを材料にした良質の備長炭が特産物になっている。土佐備長炭として大阪方面に出荷し、町の経済は大きく潤った。

4. 室戸ユネスコ世界ジオパーク

2008年に室戸ジオパークは日本ジオパークに認定され、続いて2011年9月に世界ユネスコジオパークに昇格した。「大地が盛り上がり続ける隆起地域で人々がどのように賢明に暮らして来たか」をメインテーマとする。ジオパークがユネスコに認定された以来、室戸市と地域住民は室戸市の観光業の推進に尽力している。室戸ジオパークは他の日本のジオパークに比べて指定面積が狭く、室戸市域全体が指定地となっている。換言すれば、室戸市が市をあげて「ジオパーク」で、市全体の活性化観光の核にしようと意気込む。高知や安芸市をむすぶ郊外バスの発着も、集落中心部から離れたジオパークセンターになっている。この施設は廃校をリノベーションしたもので、専従の専門職員が在駐する。2008年6月に発足した室戸ジオパーク推進協議会は、世界ジオパークネットワーク（GGN）のガイドラインに基づき、地域住民、民間企業、研究機関（高知大学等）、各種団体および行政が協力して、地球活動遺産の保護と活用を推進し、地域の持続的な発展につなげていくことを目的としている。市民が運営するガイド団体、「ジオツーリ

ズム推進チーム」が市民によって結成され、室戸岬などの主要な観光地以外の場所で、地域の生産者や自営業者がガイド活動を行っている。



写真2 室戸岬（筆者撮影）

室戸市の観光資源としては、このほかに水産業に関するものもある。地元の定置網などでとれた魚を飼育・展示している室戸廃校水族館をはじめ、キラメッセ室戸鯨館、室戸世界ジオパークセンターなどの見学・観光関連施設の整備が進んでいる。さらに、室戸高等学校での通年の選択授業「ジオパーク学」は、室戸ジオパークが世界認定を目指すなかで、教育での活用を目的として設置された。

5. おわりに—中国のジオパークとの比較

室戸ジオパークは認定後の「ジオパーク効果」により、観光客は2011年の48.7万人から、2014年には63.2万に達した。ジオパークにおける資源を活用し、新型産業転換と地域事業促進を実現しているが、ジオツーリズムの展開には、ジオパークの持続可能な発展が不可欠である。ジオパークでは自然観光が重視されるが、室戸の場合は、自然以外の資源も積極的にアピールし、研究者やユネスコの思惑とは異なる点もある。

私は修士論文で室戸と北京延慶の日中2つのジオパークを事例に比較した。日本のジオパークは、地域振興やジオツーリズムを重視する取り組みが多く地味なものが多い。それに対して、中国はアジアのジオパークネットワークの盟主として、辺境地域の観光による所得増大、広域にわたる地域振興志向が強い。自然保護を目的とする国立公園指定が遅れた中国では、ジオパークで自然の魅力伝えるだけでなく、自然と密接な関係にある人々の暮らし、歴史文化も重視した観光開発に力点を置く。ジオパークは新たな中国の国際的戦略としての発展への貢献に期待したい。

参考文献

室戸市史編集委員会編（1989）『室戸市史「上巻・下巻」』室戸市
森川洋・奥野隆史・篠原重則編（2005）『日本の地誌9「中国・四国」』
朝倉書店

（ちょう きんきん：本学文学研究科博士課程前期課程）

中国における紹興酒造業の成立とその地域展開

李 嘉文

1. はじめに

中国の酒は黄酒と白酒に大別される。黄酒は米や黍を原料とする醸造酒で、白酒は高粱などの蒸留酒である。醸造酒をさらに蒸留によってアルコール分（酒精度）を高めたものが蒸留酒であるから、白酒の歴史は黄酒のそれよりも新しい。中国での白酒の代表は、茅台酒（貴州：高粱）、汾酒（山西：高粱）、五粮液（四川：紅高粱、糯米、小麦、粳米、とうもろこし）などで、基本的に畑作地帯の穀物酒である。一方、黄酒は糯米を原料とする醸造酒で、名称は色に由来する。現在では全国で飲用されているが、中心は長江下流の稲作地帯（浙江、江蘇、安徽省など）である。その代表が紹興酒である。

この小論では浙江省紹興市を対象に、紹興酒の歴史、立地、製法、現況と当面する課題や今後の新たな展開について考察する。日本の清酒は粳米を原料とし、新酒が重視されるが、紹興酒は古酒が珍重され、酒薬（辣蓼草、陳皮、肉桂、甘草など）を加え、モリブデンが含まれた鑿湖の水で仕込む。糖度は12～19度、酸度も清酒の4倍近くあることが特色である。



写真1 甕による黄酒の貯蔵
(中国黄酒集株式会社にて2020年3月撮影)

2. 黄酒の産地

表1 中国における黄酒産地と銘酒

北部稲作地域	中部稲作地域	南部稲作地域
建連（天津）	丹陽封（江蘇）	龍岩沈缸（福建）
北京（河北）	吉南封（安徽）	福建老酒（福建）
蘭陵（山東）	江蘇（江蘇）	珍珠紅（広東）
即墨（山東）	上海（上海）	墨江酒（雲南）
陝西糜子（陝西）	浙江（浙江）	台湾（台湾）
	紹興（浙江）	
	湖南（湖南）	
	封缸（江西）	

黄酒は地域によって原料と麴の種類が異なる。代表的な黄酒は元紅酒、加飯酒、善釀酒、香雪酒（浙江・江

蘇・福建）、沈缸酒、福建老酒（福建）、即墨老酒（山東）、吉林清酒（吉林）などである（表1）。その主要産地は長江下流一帯に集中している。鮮やかな黄金色と濃厚な香り、やわらかな甘味をもつ浙江省紹興市で造られる甕による貯蔵（写真1）など伝統技法による黄酒のみに「紹興酒」という名称が与えられている。

3. 紹興酒造業の歴史

先秦時代（第1段階）

紹興地域における酒造の歴史は古く、先秦時代に（BC.770～221年頃）、『呂氏春秋』、『国語・越語』¹⁾から、越国での酒造りの萌芽が見られる。

漢代から宋代（第2段階）

西漢期には労役賦税が軽減され、人々の生活が豊かになり酒の消費量も増加した。東漢順帝（140年）に会稽太守は農業を推奨するため、海中に築堤して鑑湖を築く。この人工水利工事で半ば閉塞した湖の水質が酒造りへの有利な条件を作り出した。

南北朝時代に入り、造り酒が濁醪から「山陰甘酒」となった。宋時代、都市経済の発展、『北山酒経』²⁾の出版で醸造技術と品質が大幅に改善される。越州は紹興府となり、紹興酒の銘酒（竹葉青、瑞露酒、堂中春、蓬萊春）が誕生する。

明清時代（第3段階）

紹興では明万歴時代に酒造が大規模化し（「府城釀者甚多、而豆酒特佳、東師盛行、近省地每多用之。」『紹興府誌』）、大運河経由で北京（京城）にも大量に移送された。清代には紹興地域が全国醸造酒の生産中心地となり、酒造工場は山陰・会稽郷に集中していた。光緒年間（1875～1908）、山陰、会稽には酒造業者が1300余軒あったという。生産量も急増し、年産約74,400トンにまで増大し、全国有数の酒造地としての地位を確立する。しかし、日中戦争期には奢侈品の酒造業は縮小を余儀なくされ衰退する。中小規模の酒造会社は、蘇州、湖州、無錫、寧波など江南地域に移転した。

1950年の冬醸造から紹興酒造家が生産を再開する。1970年代初期には、紹興、東風、東方紅3つの酒造会社が紹興醸造場を設立した。1980年代に入ってからには経済開放体制と技術改良によって、生産量と販売量とも著しく増加していった。紹興は全国黄酒総生産量の10分の1を占める。1990年の黄酒生産量は12.7万トン（うち紹興酒は83,670トン、普通黄酒は43,070トン）

で、海外へ輸出量は8,000トンで、全国の黄酒輸出量のトップを占めている。

4. 紹興黄酒造業の現状

21世紀には紹興黄酒は「紹興酒」という特定地理銘酒として爆発的なピークを迎え、生産量が増大する。2005年にフランスのCAMUS（1863年創業のコニャック製造業者）と積極的に提携して海外市場を拡大して成長した。2010年には53.4万トンに達し、全国の酒類の20%を占めるに至った。しかしその隆盛期は長くは続かず、2016年以降は徐々に低迷し、国内市場も「南黄北白」という状態である。主な販売と消費地は江蘇、浙江、江西、福建、上海などの華東地域に集中する（図1）。近年はビールやワインの台頭、海外産洋酒の中国市場への進出で、紹興酒の国内消費量は伸び悩み、新たな市場開拓が課題となっている。

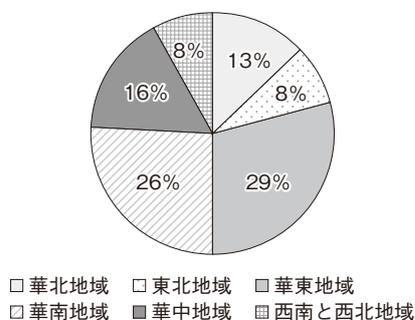


図1 紹興酒の2020年上半期の市場占有率
(中国の国家統計部門により作成)

また、商取引では売り手と買い手の双方が商品に関する非対称な情報を持っている、いわゆるレモン市場³⁾ (The Market for Lemon) 問題が明らかになってきた。紹興酒造業の各メーカーは適正な生産量を目指してきたが、技術や酒質が無視され、優劣を生んだ。そのため、小規模な酒造会社では、ブランドの紹興酒に代わって、普通の黄酒を販売して、品質の差別化を助長している。また、模造品や粗悪品が横行し、消費者からの苦情も頻出している。紹興酒造業の被害は甚大であった。

近年、黄酒の生産と販売を厳しく管理するために紹興市政府は「紹興酒ブランド使用管理法」によって紹興酒生産への新規参入を事実上禁止している。現在、中国SC認定の紹興黄酒酒造会社は約80社あるが、「紹興黄酒」と「紹興老酒」の銘柄が使用できる酒造会社は14社にすぎない。その生産量は48.6万トン、紹興市城市地区の各地に分布する。

中国酒造業は現在グローバル化の怒濤の中にある。紹興酒造業者は国家政策や市場戦略に敏感で、醸造工程での副産物開発にも尽力するなど多核化を模索する。市内優良業者の古越龍山、会稽山、塔牌などの大手業者は観光協会と結んで、「紹興黄酒町」というグルメスポットを建設した。

競争が日々激化しているなか、紹興酒造業者は積極的に革新と変化を追求し、新商品開発と地域振興を加速させてきた。2019年の紹興酒造業の産業投資は、生産品の研究開発が54%を占める。かつ製造投資のなかではプロジェクト開発が34%、新技術の開発が48%を占めている。しかし国内市場占有率では華南や華中（湖南・湖北・江西省）など南方への広がりみせるが、華北、東北地方へは2割弱とまだ少ないのが現状である。

5. 海外への販路開拓

さらなるグローバル戦略をめざして海外向けの商品も開発しているが、2015年に中国紹興黄酒は海外の輸出量は1,496万ℓで、2019年には1,315万ℓに減産している。同年の海外における輸出地域分布は、アジア地域が41%、北米地域が29%、ヨーロッパ地域が21%を占める。紹興酒の主要輸出先は、東・東南アジアの華人の多い地域である。欧州市場では黄酒が日常酒とは認識されていないため、輸出は伸び悩んでいる。

現在、紹興酒造業は全国的な不況下にある。その対策として、私は次のことを提案したい。国際的な販売網を構築する際に、大衆化、低価格化のみならず、総合的な市場をターゲットに販売促進していくため、ランク別に製品生産体制を展開することである。また、ネット通信販売のような新たな販路を積極的に開拓し、直販体制を整えていく。これに加えて、「紹興酒」の宣伝を強化するために、政府の積極的な参画が必要である。中小規模の紹興酒造会社が集団化できる紹興黄酒産業団地を建設する。また、観光客に対して、紹興酒造りのプロセス体験ができるイベントを定期的開催することが、紹興酒の販売と文化普及にもつながると考える。

【付記】本稿は2021年1月に提出した同名の修士論文の一部で、本編では伏見酒造業との比較も試みた。

注

- 1) 中国春秋時代を扱った史書、『春秋外伝』も呼ばれる。
- 2) 北宋時代に中国酒の専門書。
- 3) 商売で売り手と買い手が商品に関する非対称な情報を持って、売り手は、買い手が商品の本質を知らないため、自分の売りたい商品が不良品でも良質な商品として売ろうとする。一方、買い手は、それが低品質の商品だとわかると次第に評価をしなくなり、さらに買い取り価格を下げるため、ますます不良品が多く出回る市場になってしまう。安く悪い品質商品（レモン、皮が厚くて外見で見分けがつかない粗悪品の例）、高く良い商品（ピーチ）を対照させた証券用語である。

参考文献

- 木村春子（2005）『火の料理 水の料理—食に見る日本と中国』農村漁村文化協会
 蔡毅（2006）『中国の酒文化』東京印書館
 傅建偉（2007）『琥珀色の誘惑』五洲伝播出版社
 紹興市黄酒酒造業協会、紹興市ウェブサイトほか

(り) かぶん：本学博士課程前期課程)

これまでの大学生活を振り返りながら、15年間どっかと居座った教室の思い出を書いてみたいと思います。

私は2005年の学部入学以来、野間晴雄先生にお世話になってきました。当時の地理学教室教員陣は、最年少の野間先生の他に、橋本征治先生、高橋誠一先生、木庭元晴先生、伊東理先生でした。松井幸一先生は当時、大学院の先輩で、今とは似ても似つかない何とも言えない雰囲気があったように記憶しています。

2009年の卒業後、学部からの内部進学で博士課程前期課程に進学しました。この頃になると、今まで以上に学界に接近するなかで、関西大学地理学教室がいかに恵まれているかを肌で感じるようになりました。自然地理学もしっかりと学べる環境に加え、何より学会の一線で活躍される、いわゆる重鎮や大物と呼ばれる先生方が専任教員として学生の指導に熱を入れられていたからです。さらに、非常勤の先生方も豪華で贅沢なお顔ぶれであると理解するようになりました。

2年での修了の後、1年の社会人経験を経て、2012年に博士課程後期課程に進学しました。私のドクターコースの在籍期間は、長く険しい道のりでした。多くの後輩たちの卒業を見届ける日々は、自分だけが取り残されるという虚しい感覚がありました。また、同級生がライフステージを進めていくなかで、社会での活躍や結婚の報告を受けることに嬉しさを感じていた反面、自分だけが社会的に孤立したように思うことがあり辛くて悲しい感覚も持っていました。特に、2014年2月の高橋誠一先生の訃報は、言葉にできない悲しさと喪失感がありまし

た。

博士号を取得するまでに他の人より多くの時間を費やしました。しかし、これに関して恥じる気持ちはありません。1年間のベトナム留学、研究会・学会でさまざまな人・新たな知見と出会い、巡検や調査で多くの場所に訪れた体験、先輩・後輩たちとの交流、などの諸経験が今の“私”をつくり、これらが博士論文へ投影されているからです。決してスムーズに事が運び博士号取得に至ったとは思いませんが、「これらの過程は寄り道であって遠回りではなかった」と確信できる日が必ず来る…という形容しがたい自信が私にはあります。

最後に、博士論文公聴会の翌日から4日間にわたり「自然地理特別研究」集中講義「水の地理学」を聴講させていただきました。学生期間の最後のタイミングで授業を受けられる、ましてや専任の先生方全員のリレー講義は、貴重なものでした。来年度から大学非常勤講師として地理学を教える私にとって、非常に多くのものを学ばせていただきました。特に、野間先生の講義を受けるのは約10年ぶりです。これが野間先生の最後の授業か…と思うと感無量でした。

これまで私の15年間の学生生活には多くの出会いと別れ、多くの思い出が関西大学地理学教室にあります。多くの学友から熱い声援をいただきながら、先生方の手厚いご指導でここまで大切に育てていただきました。関西大学地理学教室に関わりのあるすべてのみなさまに感謝いたします。

(さいとう あゆこ：本学大学院博士課程後期課程)

2020年度 実習調査報告書 No.45 目次

『滋賀県湖東地区の地理 地理学・地域環境学実習調査報告書 (45)』

はしがき

第I章 地域の概観

第II章 琵琶湖の自然環境と水産にかかわる文化

第III章 湖東平野の水利と農業

第IV章 滋賀県における歴史地理とまちづくり

第V章 滋賀県における戦後の都市発展

各章の要旨、調査日誌、英文目次、編集後記

関西大学史学・地理学会 2020年度大会ポスター発表資料

関西大学地理学・地域環境学教室発行、2021年3月刊、全99頁

■ □ 日帰り巡検報告 □ ■

富田林寺内町と羽曳野丘陵・古市古墳群

藤井 純

2020年10月4日(日)、秋晴れとは言えぬ曇り空であったが、恒例の日帰り巡検が南河内の歴史的核地である富田林市・羽曳野市を中心に行われた。参加者は2・3回生や大学院生に加え、4回生、卒業生の参加もあり、のべ64人(うち教員3、卒業生3)と過去最高の数を記録した。9時45分に近鉄富田林駅前に集まり、2回生が中心となって作成した資料をもとに概要を説明後、寺内町へと向かった。

富田林寺内町は、興正寺別院を中心として形成された歴史都市である。道沿いに並んだ家々の中には江戸時代創建のものもあり、旧杉山家住宅をはじめとした豪商の家は荘厳なたたずまいを保っていた。それらが今なお残り続けているのは、そこに住む人々や自治体の維持・保存の努力によるものに他ならない。各家の玄関には修理事業のプレートが誇らしげにかかり、伝統の継承に力を尽くしていることがわかった。

この寺内町は小高い丘、石川の河岸段丘の上に立地する通りを抜けた先の展望広場からは下を流れる石川の姿を、そして緑豊かな金剛・葛城や二上山の山々を望むことができた。主に自衛を目的としてこの見晴らしの良い段丘に寺内町は形成されたが、やや川から離れた土地であるため、生活用水の確保にはさまざまな工夫がなされたという。その代表が井戸であり、広場に置かれたものがその知恵を物語っていた。先人たちの知恵を理解したところで、各自でいったん解散して昼食を取るようになった。広大な景色を眺めながら食べる人もいれば、市街地の名店へ足を運ぶ者もいた。再び富田林西口駅に集合したとき、心なしか元気になった学生が多かったため、それぞれ満足のいく食事になったのだろう。

ぞろぞろと近鉄長野線に乗り、古市駅で乗り換えて南大阪線の駒ヶ谷駅へと向かった。この地は明治期からぶどう栽培が盛んであり、それを原料としてつくられる河内ワインは非常に有名である。また、チョーヤ酒造に代表されるように梅酒の製造も盛んで、それを裏付けるように、河内ワイン館の売り場面積のうち約三分の一を梅酒が占めていた。もちろんワインの種類も豊富にあったので、家族への土産や自分への褒美としていろいろと吟味する学生も多くみられた。この陽気をそのまま切り取るように集合写真が撮影され、ある者は少し重くなった荷物を背負いながら、またある者は浮き立ちなが

ら、まだ見ぬ次の地へと歩みを進めた。

この時点で多くの者が「巡検は楽しいレクリエーションだ」と考えていたことだろう。しかし、その期待、いや楽観をあざ笑うように、巡検はその本性を見せ始めたのである。そんなこととは露知らず、一行は古市駅に降り立った。

古市といえば、近年、世界文化遺産に登録された「古市古墳群」を思い浮かべるだろう。かつての古代集落の生活は、古市大溝と呼ばれる古代の水路から窺い知ることができる。幅20mに及ぶところもあるこの水路の建設には、当然ながら重機などは使われていない。すべて人力のみで掘られている。応神天皇陵などの古墳の造営もそうだが、巨大なものをつくり上げる人の力というものはやはり偉大であると改めて感じた。この羽曳野市はどこに行っても古墳がある。道路の向こうに古墳、橋を渡れば古墳、果てには住宅街の中に古墳に出くわす。荒れた小山だと思いきや古墳であるという。そうしてうろろと歩き回り、何個目かもわからない古墳に出会う頃、学生たちは思い知ったのである。この巡検は楽なものではない、ということに、そしてここからが山場であるということに気が付いたのだ。

そこからはひたすらに歩き続けた。やはりある古墳を尻目に、向かい風に吹かれても次なる目的地、道明寺までその歩みを止めることはなかった。街区表示板が道明寺になればひとく喜び、それでもたどり着かない目的地に憂いを隠せなかった。全員が境内に入るころには、それぞれがベンチに腰掛け、疲れを顔に滲ませていた。ようやくたどり着いたこの寺は、当初は道明寺天満宮の神宮寺として建立されたが、現在は敷地を異にしている。また、この地を拠点として発掘調査の行われた^こ国府遺跡からは多くの出土品が確認され、その一部は関西大学博物館に収蔵されているという。

その後、重い足を引きずりながら、近鉄の道明寺駅へと向かい、近鉄最古の道明寺線にて柏原南口駅へと向かった。たかだか2分の電車移動であったが、これほど文明に感謝したことはないだろう。それと同時に、移動手段が徒歩のみで、ろくに道路も整備されていない時代の人々の健脚さにただただ感心した。

無人駅を降り、奈良と大阪を悠然と流れる大和川の堤防に集まった。川は人に大いなる恵みをもたらすが、時に牙をむきすべてをながすこ

深谷早紀

多くの方に支えられ、楽しい時間を過ごすことができました。他の専修では学ぶことのできない貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

藤井美来

巡検で色々な場所に行けて楽しかったです。地理学を通じて色々学ぶことが出来ました。3年間ありがとうございました。

富士元莉乃

ベトナムや軽井沢など色々なところに行けて楽しかったです。ありがとうございました。

松本恵利奈

地理学の面白さに魅せられた3年間でした。他では得られないような経験を、講義や巡検から学ばせてもらえました。本当にありがとうございました。

安平彩乃

この4年間は人生で一番短い4年間に感じました。地理学のメンバーがみんな本当に良かったです。楽しい時間をありがとうございました！

LEE Megan Jia Mian (李 嘉敏)

この4年間、いろいろなところに日本のことに魅力を感じました。たくさん思い出ができて、皆さんと楽しい時間を過ごせました。今までありがとうございました。

藤丸結生

地理学専修に転入学してから2年。あっという間でしたが、たくさんの貴重な知識・体験を得ることができました。本当にありがとうございました。

兼子真直

2年間存分に地理学が学べてよかったです。ここでの見聞を、今後、教壇の上でも生かせるようにがんばります。

林 万葉

地理学専修では、現地でのどのような調査をするかについて自分で考えて行動するということが非常に重要であることを学びました。学んだことをこれからの社会人生で活かしていきたいです。

〈大学院生〉

海 思琪

地理学で過ごした3年間は沢山の人と出会い、フィールドワークや実習調査だけでなく、記念式典や学会などのイベントも重なり、私にとって貴重な経験になりました。先生方のいつも温かいご指導に感謝いたします。

趙 欣鑫

自分が好きな地理学での学びは幸運です。大学院の生活はすごく充実、いい経験になりました。2年間を支えてくれた先生たちに感謝します。関大地理学教室の更なる発展を願っております。

李 嘉文

関西大学の地理教室で貴重な3年間を送った。この3年間に、日本の全国各地を巡り、様々なことを経験し、充実した生活ができた。心より感謝いたします。

齋藤 鮎子

関西大学地理学教室には多くの思い出があり、この限られた文字数では伝えきれません。なので、本号「学窓から」をご覧ください。あえて一言申し上げます。関西大学地理学に対して…栄光あれ！所属学生のみなさんに…関西大学地理学教室に誇りを持って！

ともある。かつての大和川もまた洪水をおこしやすい川であったが、中甚平らの尽力によって付け替え工事がなされ、現在の大和川の流れに至ったという。堤防にはその偉業をたたえる碑文や、中甚平の像が建てられており、今日の安全が過去の彼らによって為し得られたものだとして、胸が熱くなった。

すっかりあたりも暗くなったころ、長瀬川沿いを歩いていると、川の向こうに走っている電車の明かりが見えた。つまり最後の目的地が近いということだ。思わず一行の歩みが早まる。そして5分もしないうちに、より大きな光が見えてきた。ついに最終地点、JR 柏原駅に到着したのだ。額に滲んだ汗を称えるような一陣の風が吹き、妙にすがすがしい気分とともに日帰り巡検のすべての行程を完遂した。

今回の巡検で、人の力の偉大さを改めて感じた。今回訪れたところのほとんどが保存や開

発、そして造営などといった、人が大きく関わっているものであり、なおかつ大半が重機を使わずに人の手でなされたものである。このような建造物は案外私たちのそばにあるものであるが、普段それを意識することは少ない。事実、羽曳野市にみられた古墳群には、日中にもかかわらず人の姿は見ることはなかった。しかし、いまの私たちの生活は、先人たちが踏み固めた知恵と工夫や歴史の上に成り立っている。ならば、それを知ることが今を生きる私たちの務めではないだろうか。だからこそ、この巡検では歩くこと、つまりもっとも単純な人の力をもって体感したのではないだろうか。

最後になりましたが、この巡検を計画、実行して下さった先生方に御礼申し上げます。今日の経験を活かし、これからの学びと研究の糧としたいと思います。

(ふじい じゅん：本学2回生)



河内ワイン館（羽曳野市駒ヶ谷，2020年10月4日）

教室へのご寄付のお礼

専任教員一同

昨年12月の大学が冬休みに入る直前でしたが、ノエビアホールディング代表取締役社長の倉俊氏より、関西大学に多額のご寄付があったと事務から連絡を受けました。氏は関西大学文学部史学・地理学科で地理学を専攻し、1988年3月に卒業されました。後に社会人として、本学の芸術学美術史の博士課程前期課程も修了されています。父である会長の大倉昊氏のご子息で、化粧品メーカーの「ノエビア」がホールディングの主力会社です。ほかに医療・健康食品の常盤薬品工業、八尾空港を拠点にする航空運送・関連事業のノエビア アビエーション、銀座ではアートギャラリーも経営されている東証一部上場会社です。

これまで毎年のように、倉様には地理学研究会あてにご寄付を頂いておりましたが、今回は法人を通しての指定寄付という形でした。この浄財の用途について、いかに専修での教育や卒業生のため役立てるかで、専任教員4名で相談しました。

その結論として、学術雑誌『ジオグラフィカ千里』の刊行費用を中心に充てることにさせていただきました。

『ジオグラフィカ千里』は伊東理教授の退職を記念して、教員、卒業生などに声がけして第1号を2019年に刊行しました。続いて、第2号を木庭教授の退職にあわせてその1年後に予定していましたが、諸般の事情でいまだ刊行できておりません。いちばんのネックが刊行費用です。まず、今回のご寄付はこれに充当させて頂き、その残額は第3号以降の刊行にも活用させていただく所存です。

この発行主体は、現職・旧教員や現役の学生・大学院生、卒業生を主体に2019年に発足した千里地理学会です。関西大学地理学研究会を発展的に継承しながらも、学会組織として専修の学術的な砦となるものです。現在、専修の大学院は、留学生の増加で新たな活気をみせています。毎年の刊行はこの規模の教室では難しいのですが、学生の教育・研究の要となるこの雑誌の持続的な刊行ため、教室としては、同窓会とも緊密な連携を取りあいながら有効に活用させていただく所存です。

■ □ 実習調査報告 □ ■

滋賀県湖東地区での実習調査

前山みつき

新専修生から
の一言大学院
(秋学期入学)

私たちは2020年10月6日、7日に滋賀県湖東地区での実習調査を土屋先生、黒木先生、ティーチングアシスタントの藤丸紘生さん（4回生）の指導の下で行いました。1日目は滋賀県に詳しい野間先生にも現地で助言頂きました。本来は宮崎県都城市での4泊5日の実習調査を行う予定でした。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、期間を1泊2日に短縮して滋賀県で実施することになりました。春学期もオンライン授業となったため、各学生がテーマを持って実習調査に向けてのレポートを、二次資料を用いて作成しました。自宅で1人パソコンに向かってレポートを書き上げるのは情報面、精神面で苦しいときもあり、各担当の先生との電話相談は非常に支えになりました。夏休みに入る前には桜井・宇陀・曾爾での1日バス巡検（これも通常は2回生も参加して大型バスいっぱいになるのですが、「3密」を避けて実習受講者のみとなりました）と2回対面での補講が行われました。補講では各班のメンバーがレポート内容を共有し、班全体としての実習調査目的やフィールド調査で訪れる場所、調査項目を決めていきました。聞き取り調査を行う班は電話や手紙でアポイントを取り、中にはコロナの影響で予定通りに計画が進まない班もありましたが、1日のみの現地であることを考え、現地調査に取り組みました。

実習調査1日目は京都駅八条口に全員集合し、貸し切りバスに乗車してまずは比叡山を見学しました。国宝である根本中堂が大改修を行っており、建物全体が素屋根に覆われていましたが、内部の拝観が可能であり、ふだんは目にするのことができない貴重な光景を修学ステージから臨むことができました。その後、堅田、琵琶湖大橋を経て近江八幡の城下町を、お昼休憩を挟んで散策しました。午後からは、大中之湖干拓地を車窓から見学し、近江商人ゆかりの地である五個荘金堂の重要伝統的建造物群保存地区を散策しました。最後の見学地、閉館時間ぎりぎり到着した彦根城では、開館時間にまにあうように野間先生が先頭で必死に歩いているのが、天守閣から見た夕日に染まる琵琶湖と同じくらい忘れられないです。バスでの移動中は各

自が春学期に作成したレポート内容を発表していました。



近江八幡市八幡堀付近（2020年10月6日）

2日目は各班に分かれて調査に向かいました。班の研究テーマは「琵琶湖の自然環境と漁労生活」、「湖東平野の地形と農業」、「歴史・文化とまちづくり」、「京阪神大都市圏の縁辺地域としての発展」の4つでした。

私は「京阪神大都市圏の縁辺地域としての発展」班として、草津市にある南草津駅周辺の土地利用の変化について現地調査を行いました。草津市立図書館で住宅地図をコピーした後、地図を片手に工事中や新設の店舗など、最新の土地利用を地図に書き込んでいく作業を地道に行いました。南草津駅は立命館大学びわこ・くさつキャンパスの設立に伴い新設された駅であり、比較的新しいマンションやアパートが駅周辺に多く立地していました。地図上では駅前にあった老人ホームが現在では取り壊されマンション建設予定になっており、これからも人口が増加し発展していく確かな予感がしました。

今年は前年度までのように4泊5日で現地調査を行うことができず、最終報告書を無事書き終えることができるのか不安な点もありますが、1日という限られた時間を有効的に使い切れたのではないかと思います。現地調査を行うまでの二次資料を用いてのレポート作成、グループでの行動計画立案、アポイントをとるなどの事前準備、そして今後の報告書作成の一連の作業過程は、今後地理の研究だけでなく、他の分野や就職してからも必要なことであり、今回の経験をこれからは活かしていきたいと思えます。（まえやま みつき：本学3回生）

何 雪聲

(博士課程前期課程)

中国重慶市出身です。カメラを持って外に出て身近にある「隠れた魅力」を発見することが好きです。大学は日本語専攻なので地理学についての知識が薄いですが、よろしくご指導ご鞭撻をお願いします。

蔡 伊寧

(博士課程前期課程)

初めまして、中国浙江省台州市出身です。大学は日本語専攻です。趣味は旅行で歩きながら地域独特の景色や文化を楽しむのが好きですから、大学院でフットパスについて研究したいです。まだまだ未熟なところがたくさんありますが、どうぞよろしくお願ひします。

李 蕊君

(博士課程前期課程)

初めまして、中国の広東省広州市出身です。大学で国際貿易を学びました。中学時代からずっと地理学に興味をもっていました。大学院で経済地理学の視点において、産業の立地を研究したいです。趣味は旅行と料理です。どうぞよろしくお願ひ致します。

大学院生の研究業績 (2020年1月～12月)

【論文・書評・書籍等】

- 齋藤 鮎子 「宇都宮一下野国奥州・日光街道の分岐点―」, 野間晴雄・山近博義・矢野司郎編著『地図でみる城下町』海青社, 2020年3月, 24-25頁
 「静岡一家康大御所時代の駿府九十六ヶ町―」, 同上, 56-57頁
 「昭和初期における出汁利用の地域差―『食集採取手帖』の記述から―」, 『地理』第65巻第4号, 2020年4月, 20-29頁
 「ベトナム紅河デルタの専業村における家内工業の実態―ハーナム省チュウ村のライスペーパーを事例に―」, 『関西大学東西学術研究所紀要』第53輯, 2020年4月, 173-206頁
- 劉 天星 「(書評) 村松伸・加藤浩徳・森宏一郎編『メガシティとサステナビリティ (メガシティ1)』」, 史泉, 第132号, 1-6頁, 2020年7月
- 鄭 梓鈺 「(書評) 小林真樹著『日本の中のインド亜大陸食紀行』」, 史泉, 第132号, 7-12頁, 2020年7月

【学会・研究会発表】

- 齋藤 鮎子 「ベトナム紅河デルタにおける食品製造村の製造者間ネットワークが織りなすフードスケープ (foodscape)」, 関西大学東西学術研究所第3回研究例会 (風景表象研究班), 2020年関西大学千里山キャンパス, 2020年9月22日
- 鄭 梓鈺 「日本におけるカレーの受容と多様化・新規参入の諸相 ―その文化地理学的考察―」2020年度 関西大学史学・地理学大会 (口頭発表), 2020年12月5日 (リモート開催)
 「滋賀県湖東地区における生態と人間社会」2020年度 関西大学史学・地理学大会 (ポスター発表), 2020年12月5日 (リモート開催)
 「滋賀県湖東地域の自然・人文地理」第2回千里地理学会大会, 2020年12月12日
- 劉 天星 「大都市近郊地域の都市化から見る工業地域の変容 ―中国重慶市九龍園工業団地を例として―」, 関西大学史学・地理学大会 (口頭発表), 2020年12月5日
- 徐 雨辰 「近世日本の砂糖生産における讃岐と奄美」, 関西大学史学・地理学会 (口頭発表), 2019年12月5日
 「近世日本の砂糖生産における奄美大島と喜界島」, 人文地理学会大会2020年大会, 2020年11月14日 (リモート開催)
 「滋賀県湖東地区における生態と人間社会」2020年度 関西大学史学・地理学大会 (ポスター発表), 2020年12月5日 (リモート開催)
- 朱 子同 「鉄道ネットワークの拡大による京阪神大都市圏の構造変容に関する研究 ―鉄道会社間の直通運転に注目して―」2020年度 関西大学史学・地理学大会 (口頭発表), 2020年12月5日 (リモート開催)
 「滋賀県湖東地区における生態と人間社会」2020年度 関西大学史学・地理学大会 (ポスター発表), 2020年12月5日
 「滋賀県湖東地域の自然・人文地理」第2回千里地理学会大会, 2020年12月12日

【博士学位論文】 (2021年3月)

- 齋藤 鮎子 「供給者の視点からみた食をめぐる生活世界―東アジアの粉食を中心に―」

2021年度教室行事予定 (2021年4月～2022年3月)

4月8日(木)	専修オリエンテーション A301教室 12:15～12:55	市) 黒木・土屋担当
5月22日(土)～23日(日)	一泊バス巡検 有田, 湯浅, 御坊, 和歌山 土屋・黒木担当	10月10日(日) 大学院M・D入試, 大学院M学内進学試験
7月11日(土)	大学院M・D入試(秋学期入学), 春学期大学院M学内進学試験	12月4日(土) 関西大学史学・地理学会大会(関西大学) <u>卒業生も参加可能</u>
7月17日(土)	大学院合同演習(梅田キャンパス)	12月11日(土) 第3回千里地理学会大会(関西大学) <u>卒業生も参加可能</u>
9月30日(木)	卒業論文中間発表会	2月19日(土) 大学院M・D入試, 大学院M学内進学試験
10月3日(日)	日帰り巡検(神戸市) <u>卒業生も参加可能</u> , 野間・土屋担当	3月19日(土) 卒業式
10月5日(火)～9日(土)	地理学実習調査(仙台)	3月22日(火) 学位授与式

教室だより

■この半年、新型コロナの感染拡大が懸念される状況でしたが、関西大学では、秋学期は原則、対面での授業となりました。ただし250名以上の大講義はリモートでの実施でした。地理・地域環境関係の専門科目でリモート講義はなかったのですが、共通教教育科目では該当するものがありました。ご担当の非常勤講師の先生方のご協力に感謝します。ただ、フィールドワークの指導などで、これまでにない対応が必要となりました。また、実習調査（土屋、黒木担当）は、当初の予定であった宮崎県都城市を滋賀県湖東地方に変更し、しかも例年実施していた一市町村での集中的な調査は行わず、班ごとの中域調査となりました。しかし、例年刊行しているような調査報告書とはやや内容は異なりますが、なんとか3月の刊行に漕ぎ着けられました。

なお、4月からの1年間は松井幸一准教授が在外研究のため不在となり、教室運営は土屋・黒木・野間の3名で行います。

■卒論中間発表会

9月24日（木）10時から17時40分まで第1学舎A301で実施しました。コロナ感染の影響をふまえ密を避けての開催でした。発表者は4回生で、卒業論文を提出予定の24名でした（うち1名は後日レジュメ提出）。

■秋の日帰り巡検

10月4日（日）に秋の日帰り巡検が開催されました。「富田林寺内町と羽曳野丘陵・古市古墳群」でコースは以下の通りでした。担当は野間晴雄、土屋純教授。OBも含め64名という過去最大の人数となりました。

近鉄長野線富田林駅改札口～富田林寺内町～石川段丘遠望（昼食・一次解散）～富田林西口駅～駒ヶ谷駅～河内ワイン館・ぶどう栽培見学～駒ヶ谷駅～古市駅～古市大溝～応神天皇陵～道明寺～道明寺駅～柏原西口駅～大和川旧河道～JR 柏原駅。

■地理学・地域環境学実習

10月6日（火）から7日（水）にかけて、滋賀県湖東地区にて実習調査を行いました。指導教員は土屋・黒木教授でした。3年次生23名と、大学院博士前期課程1年次生2名、ティーチングアシスタント（藤丸紘生）1名、教員2名の計32名でした。1日目は京都駅～比叡山根本中堂～奥比叡ドライブウェイ～堅田～近江八幡（昼食）～大中之湖干拓地～五個荘金堂～愛知川～彦根市内～彦根城のコースでバス車内や戸外で各人が調べたことを発表しました。夜は彦根駅前のホテルサンルートにGo To トラベルを利用して格安で宿泊しました。密を避けて夜は貸し切りでのホテルでの夕食でした。翌7日は班ごとの行動でした。それら成果をまとめた調査報告書『滋賀県湖東地区の地理』が2021年3月に刊行され、全国の地理学教室やお世話になった関係者・機関に発送の予定です。

■地域調査士講習会

10月25日（日）に関西大学千里山キャンパスで日本地理学会の第3回地域調査士講習会が予定されていましたが、コロナ感染症拡大を防ぐため、オンライン講習会に変更となりました。土屋純教授が「心構え」の講義を行

いました。連絡責任者は松井幸一准教授。また、伊東理（関西大学名誉教授）が地域調査士認定委員会委員をつとめています。

■第2回千里地理学会大会・卒論セミナー

12月12日（土）第1学舎E602階会議室で、14時から15時まで卒業論文を書く現3回生を対象に卒論セミナーを開催しました。担当は土屋教授でした。そのあと15時から18時まで、同じ教室で、第2回千里地理学会大会が開催されました。昨年度から従来の地理学研究会の名称に代わって、新たに発足した千里地理学会の名称で実施しています。大学からも学会開催補助をいただき、発表者・講演者には関大の地理学教室出身者以外の方にもご依頼して、より活発な活動を目指していきます。

今回は本学大学院非常勤講師で、遼寧省瀋陽出身で、文化大革命のあとに日本に留学、長年、中国語の講師や地域活動、餃子の文化地理で学位もとられた大手前大学教授の于亜氏ご講演いただきました。ほかに社会人として大学院を修了され、長年、海外旅行の手配に関わってこられた東出修一氏、4月からの新たに着任した黒木教授の発表もありました。またそれに先だって、M2による実習調査の成果報告を行いました。

発表題目は以下の通りです。朱子同・鄭梓鈺（関西大学大学院博士前期課程）「滋賀県湖東地域の自然・人文地理」、東出修一（元・日本旅行）「旅行業界の懸河に棹さして—アウトバウンド、インバウンド、そしてコロナ—」、于 亜（大手前大学教授）「出会いに支えられた研究生活」、黒木貫一（関西大学）「神社に着目した自然災害伝承時空間の確認」。今回はコロナ禍によって、例年開催していた忘年会を兼ねた懇親会は中止しました。

■集中講義の実際

2021年1月27日（火）～31日（土）に大学院博士前期課程向けの「自然地理学特別研究」を香川県からの非常勤講師によって予定していましたが、しかし、コロナ禍による県外移動の自粛要請によって、開講が不可能となりました。そのため、急遽、専任の4名で「水の地理学」のテーマでリレー講義を行い、最終日には琵琶湖疏水に関する臨地授業を実施しました。

■教員の国外出張（2020年10月～2021年3月）

コロナ禍で海外渡航が原則禁止となっており、この期間の外国出張はありませんでした。

■2021年3月の卒業生・修了生・学位取得者

本年度の卒論提出者は26名、大学院博士前期課程の修了者は3名です。25名が卒業予定です。卒論・修論題目は秋号に掲載します。2021年2月9日に実施した口頭試問の結果、西口輝一さんの「通勤・購買行動からみた京阪神大都市圏の都市間結合」が最優秀論文となり、卒業式のときに学部長表彰をうけます。

また、この3月22日には、学部から専修に在籍し、TAなどで多くの学生が世話になった齋藤鮎子さんが「供給者の視点からみた食をめぐる生活世界—東アジアの粉食を中心に—」で学位（主査：野間晴雄）を授与されます。1月26日のオンライン公聴会には学外からも多くの参加がありました。

地域環境学コースでは測量学の講義（「測量学1」・「測量学2」、各2単位）と実習（「基礎測量学実習」・「応用測量学実習」、各1.5単位）が必修科目となっています。地域環境学の所定の課程を修めると卒業後に測量士補の資格を取得できますが、カリキュラムの変更で地域環境学コースがなくなることとなりました。コース廃止にもなって測量学の講義・実習も閉講となります。この小稿ではおそらく2021年度が最後となる測量学講義・実習についての覚え書きを記しておきたいと思います。

測量学講義・実習の開講は2003年度に遡ります。最初に担当されたのは木全敬蔵先生（元奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター測量研究室長）でした。木全先生には2004年度末に定年退職されるまで指導いただきました。

実習にはティーチング・アシスタント（以下TA）がつかます。開講当時大学院に在籍していた私が初代TAとして木全先生を補佐することになりました。大学院に進学する前に少しばかり測量の実務経験があったためです。私がTAを務めたのは最初の1年間（半年だったかも知れませんが）、その後は大学院への進学が決まっていた森本英揮君が引き継いでくれました。やがて測量学実習を履修した学生（主に2年次生）の中から次年度のTAを選ぶことが通例となりました。曾我傑、青山（旧姓佐藤）ふみ、徳田匡秀、小池清訓、中安稜、小川諒也、松川昭太郎、蔭山胡桃、桑名友太、松本恵利奈の諸君がこれまでTAを務めてくれました。なおTAの報酬は1日につき4400円、この金額は2003年度から2019年度まで20年近く変わっていません（2020年度はTAなしでした）。

2005年度から水野浩先生（水野建築設計事務所代表）が講義と実習を担当されました。水野先生は2003年度秋学期から実習の一部（CADを使った測量図の製図）を担当されていました。水野先生にはおよそ10年にわたって指導いただきましたが、業務の都合により2014年度春学期をもって辞職されました。

2014年度秋学期は大橋健一先生（明石工業高等専門学校名誉教授）が講義を担当されました（実習は水田が担当）。2015年度から講義・実習ともに大橋先生が担当され、私も実習の一部を（大橋先生と交代で）担当することになりました。大橋先生には2019年度末に定年退職されるまで指導いただきました。現在の実習内容は大橋先生が作成されたシラバスを踏襲しています。屋外で距離測量、トラバース測量、水準測量、平板測量、曲線

の測設などを実習し、教室でトラバース網の座標計算、測量図の製図、写真測量などを実習します。屋外での実習場所の変更や順番の入れ替え等はありませんが、大まかな構成は木全先生の頃から変わっていないと思います。水曜3限が講義、4限・5限が実習という時間割も開講当初から変わっていません。秋学期の終盤は陽が短く、5限の途中で日没のため観測終了、ということも多々ありました。

2020年度から不肖ながら私が講義・実習を担当することになりました。当初は別の方が担当される予定でしたが、業務の都合で辞退されました。COVID-19感染拡大の影響で授業開始が延期されるという前代未聞の事態に直面しましたが、5月末から実習の対面授業が可能となり、8月初旬まで補講を実施して遅れた分を取り戻し、何とか授業計画を消化しました。今年を受講生、田村莉菜、村上大成、村上千紘の3名は頑張って課題に取り組んでくれました。秋学期からは講義・実習ともに対面授業となり、特にトラブルもなく無事1年間を終えることができました。

測量技術者は「あと10年でなくなる仕事」の一つと言われているそうです。距離や位置、面積を測定する測量そのものがなくなることはおそらくないものの、今後はレーザー測量やドローン画像解析、GNSSなどが主流となり、20世紀の技術から大きく変わると考えられます。技術革新や専門分化が進むにつれて文学部の地理学から測量学の科目がなくなるのは時代の趨勢かも知れません。これまで測量士補の資格を取得した卒業生のうち数名が測量関係の仕事に従事しているので、資格認定科目としては一定の役割を果たしたかと思います。卒業生の1人でTAも務めてくれた中安稜君が、先日「測量会社を退職してドローン撮影の会社を始めました」と挨拶に来てくれました（<https://www.sky-entrance.info/>）。今後の彼の活躍に期待したいと思います。

（みずた けんじ：大手前大学史学研究所研究員、本学非常勤講師）

今回の号から奥付の発行者を以下のように変更します。また「千里地理通信」の英文名（1頁）もそれに合わせて変更しました。

千里地理通信 第84号

2021年3月19日 発行 (350部)

関西大学地理学・地域環境学教室

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35

関西大学文学部地理学・地域環境学教室内

編集担当：野間晴雄

TEL：06-6368-1121（内線4890：大学院生室）

e-mail：kandaichiri@gmail.com

<http://www2.kansai-u.ac.jp/kugeoenv/>

郵便振替：大阪00970-4-81149